

# 東海道編

## 朝日～来女

発行／(一社)四日市観光協会  
〒510-0075  
三重県四日市市安島一丁目1-56  
TEL.059-357-0381  
http://kanko-yokkaichi.com/  
E-mail:kanko@m3.cty-net.ne.jp

2025年10月第11版発行



### 街道よもやま話

東海道は江戸日本橋から京都三条大橋間の約125里(約500km)。旅人は、朝4時頃に宿を立ち、夕方6時頃まで一日平均約10里、12～15日で歩いたという。

諏訪神社のすぐ先からアーケードのある商店街に入っていくが、これが、れっきとした東海道とは、こんな区間も珍しい。宿場の面影こそないが、今も街の中心街として栄えている。

街道は途切れ国道一号線と合流する。信号で反対側の歩道に渡っておこう。



**⑥志氏神社**  
享保10年(1725)の鳥居や、文政元年(1818)・天保10年(1840)の常夜燈がある。この神社の狛犬(市指定文化財・S31.2)には、神様が留守を守るように言いつけたにもかかわらず、遊びに出かけてしまったためそれぞれ左右の前足を折られてしまったという伝説が残る。また、街道沿いの鳥居近くには、撫でると良縁が成就するという夫婦石がある。



**④善教寺**  
善教寺には、二つの国指定重要文化財(S34.12)が奉安されている。阿弥陀如来立像は、鎌倉中期の作で、木造桧材寄木造りで、玉眼・漆箔を施した優美なもので、像高79cm。また、胎内納入文書とともに、胎内仏として約800体の摺仏が発見されている。



**②長明寺**  
文治年間(1185～90)に蒔田相模守宗勝が居城した蒔田城跡といわれ、境内は素掘りの環濠に囲まれている。北側に隣接して観音堂があり、堂内の厨子には見事な龍の彫刻がみられる。桑名城より移築の山門、元文3年(1738)刺違切腹の薩摩義士の墓など。



「東海道五十三対 四日市」歌川豊国

朝明橋が出发点。高速道路の高架がよく見える。昔の道と現代の道のコントラストだ。

この辺りには、お寺が多いと思いながら歩く。昔の人も道すがらいろいろな発見を楽しんだのではないだろうか。

東海道の木札を玄関や堀に掲げている家が多く、確かに東海道を歩いているのだと実感があつた。

この曲がり角は、見落とさないように。中町通りへと進む。

魚屋さんの調理する焼き魚の匂いがしてくる。旅人は、「焼蛤」を賞味したとか。復活させて欲しいな。



「東海道五拾三次 桑名・富田立場之図」歌川広重

**なが餅**  
餅で餡をくるみ、薄く長くのばした独特の形。両面が軽く焼いてあり、焦げ目が香ばしい。江戸時代より、伊勢参りの土産物として知られていた。



**①宝性寺**  
本堂が市指定文化財(S52.10)。木造二重屋根御堂造瓦葺で、上棟木札によると、享保4年(1719)己亥6月建立。現在の本堂は、瓦の銘に文化11年(1814)とある。



「東海道五拾三次之内 四日市・三滝川」歌川広重



**③富田一里塚跡石標**  
三ツ谷・日永・采女とともに、東海道の四日市における一里塚跡のひとつ。(県指定文化財・S12.11)



**⑤力石**  
お堂建設中、作業にあたった男達が力比べをしたと伝えられる石。重さは、32貫(120kg)もあり、肩まで持ち上げられる者はほとんどいなかったとか。



**⑦三滝橋**  
三滝橋を渡ると四日市宿に入る。安藤広重の描いた三重川は、この三滝橋あたりだといわれている。当時は、川遊びや夕涼みなどの憩いの場であった。



橋のたもとにある広重の絵で、昔と今の三滝橋を比べてみて。

街道から外れて、中部西小学校の校庭(西角)の四日市宿陣屋跡(代官所)に立ち寄ってみた。今は何も残っていないのが残念だが、気分は旅人、先人達に思いを馳せる。



**⑧手差しの道標**  
本来は「江戸の辻」にあったものを、複製したものである。「すぐ江戸道」「すぐ京いせ道」と刻まれており、さらに丸の中に人差し指で方向を示す手が彫られているユニークな道標である。

四日市市  
鈴鹿市

# 采女

約2.7km  
采女町交差点 ←→ 内部駅前

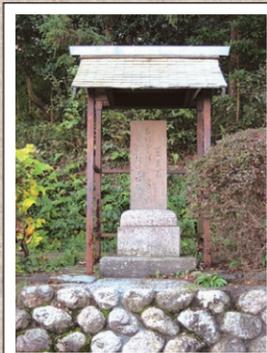
# 小古曾

約3.5km  
内部駅前 ←→ 天白橋

# 日永

約2.4km  
天白橋 ←→ 中央通り

# 四日市



**⑦芭蕉の句碑**  
宝暦6年(1756)建立。昭和51年移築。「笈の小文」の旅でここを通った芭蕉が残した「歩行(かち)ならば杖つき坂を落馬かな」の句が刻まれている。これは、馬で登ろうとしたが、坂が急なため馬の鞍とも落馬したことを詠んでいるといわれる。



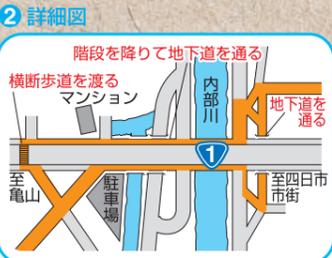
**⑬杖衝坂**  
東海道では、箱根、鈴鹿峠に次ぐ難所のひとつで、日本武尊が東征の帰りに極度の疲労のため腰の剣を杖にして登ったという急坂。

**④四日市宿**  
市庭と湊から発達した東海道43番目の四日市宿。16世紀頃にはすでに四のつく日には市が開かれていた。徳川時代には海上十里の渡しで、尾張の宮宿(熱田)まで船の便があり、交通の要所だった。

**日永うちわ**  
丸竹の節から上を60本前後に割って団扇の骨にする「丸柄の元割」の手法。旅人の土産物として農家が副業で作っていた。



**⑭名残松**  
昔は300本余りも続く松並木だったといわれているが、現在は、街道筋に1本だけ残っている。



日永の追分は、三方を道路に囲まれた、一段高い場所に建っている。

道標がアスファルトに半分埋もれていて肩身が狭い。左追分とある。

両聖寺の山門にはユーモラスな狛犬がいるから探してみよう。また、お盆には「つつく踊り」という郷土のおどりが行われる。

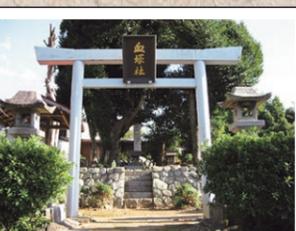
鹿化橋を過ぎたあたり結構車の往来が多い。生活道路として使われているのがよく分かる。気をつけて!

日永一里塚跡の石標を通り越して戻ると、西唱寺の十字路近くの民家に拍子抜けする程、馴染んで立っていた。これは、見過ごしてしまうと納得。

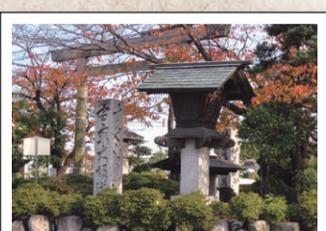
崇顕寺は作家丹羽文雄が生まれたお寺だ。「鮎」で高い評価を受け、ふるさと四日市を描いた「葉の花時まで」など数多くの名作を世に出している。

**⑨鶴森神社(浜田城址)**  
鶴森神社は1470年に築造された浜田城があったところで、浜田城主の先祖といわれている藤原秀郷や初代城主田原忠秀らを祀っている。また、国の重要文化財に指定されている十六間四方白星兜鉢が保管されている。

**三重の名の由来**  
「古事記」によれば、東征の帰路、伊吹山に登って病にとりつかれた日本武尊は、「三重の村」にさしかかったとき、「私の足は三重に曲がってしまった」と嘆き、このことから「三重」という地名が付けられたという。



**⑮血塚社**  
采女の杖衝坂を登りきったところ。鳥居の奥にある血塚の祠は、日本武尊の血で染まった石を集めて葬ったと伝えられている。



**⑮日永の追分**  
東海道と伊勢街道の分岐点となったところ。茶屋や旅籠が並び、間の宿としても栄えた界隈。京都へ往來する人はここで伊勢神宮を遥拝した。(県指定文化財・S13.4)



「東海道五拾三次 四日市」歌川広重

**街道よもやま話**  
「東海道中膝栗毛」の弥次さん喜多さんが参宮のため伊勢へ向かったが、日永の追分の茶店で金比羅参りの男と名物饅頭の食べ合いの賭けをすることになった。結局、食べ合いに負け大金を巻き上げられてしまうが、男は手品師で餅を袂に入れ込んでだまされたというエピソードだ。



**⑯日永一里塚跡石標**  
江戸からちょうど百里にあたる日永一里塚跡石標(県指定文化財・S13.4)が、建物と建物の狭いところにやや傾き加減に建っている。かつては9m四方、高さ2.5mの盛り土の塚が街道の両側にあった。



**⑫日永神社**  
日永神社の境内に明暦2年(1656)の銘が入った、東海道に現存する最古の道標がある。僧侶が伊勢参宮の人々のために建てたもので、元は日永の追分にあったようだ。



**⑪大聖院(だいしょういん)**  
京都総本山醍醐寺三寶院直末、江戸時代は神戸藩主御祈願寺でした。源頼義公の念持仏本尊不動明王(秘仏)は、大正四年(1915)国宝(重要文化財)に指定されています。堂内拝観は不可。



**⑩浜田の町並み**  
当時は、千鯛屋、材木屋、紙屋をはじめ、餅などを売る水茶屋があつて賑わっていた。今も街道に沿って、連子格子の古い民家が軒を連ねており風情が残っている。